

P-117 癌性胸膜炎に対する胸腔鏡補助下胸腔内 灌流温熱化学療法の実験

大分医科大学第二外科¹、同心臓血管外科²

○三浦 隆¹、田中康一¹、中城正夫¹、河野洋三¹、
在永光行¹、庄司 剛¹、葉玉哲生²、内田雄三¹

【目的】肺癌の術中術後に診断された癌性胸水および播種性病変に対する治療として胸腔鏡補助下に43℃のCDDP加蒸留水(Hypotonic CDDP)で灌流する胸腔内温熱化学療法(以下IPHICと略す)を施行した。その方法と施行した2症例について報告する。

【方法】全身麻酔下、胸腔鏡補助下に胸膜播種巣を可及的に切除後、2本のチューブを胸腔内に留置し、恒温槽とポンプを含む回路に接続。CDDP200mg/M2を加えた蒸留水を43℃にて約1時間灌流する。

【症例】症例1:70歳男性。末梢型腺癌に対して右上葉切除術と術中播種巣(D1)を認め、Hypotonic CDDP療法を施行。pT4N0M0 stageⅢB。術後1ヶ月目の胸水細胞診にて陽性と診断されIPHICを施行。IPHIC施行後12ヶ月増悪なく生存中である。症例2:76歳男性。右下葉末梢の腫瘍性病変に対して胸腔鏡下生検を行い、播種巣(D2)を伴う腺癌と診断した。pT4NXM0 stageⅢB。初回術後3週目にIPHICを施行。IPHIC施行後6ヶ月増悪なく生存中である。2症例とも術中術後に重篤な合併症なく、また化学療法による副作用も軽度であった。

【まとめ】胸腔鏡補助下のIPHICは侵襲が少なく、また播種巣の発見と切除を充分に行うことが可能であり、局所コントロールの点から臨床的に有用である。

P-119

びまん性悪性胸膜中皮腫の喫煙歴について
兵庫医科大学第三内科 ○二宮浩司 中野孝司
河野純朗 山下博美 眞城美穂 外村篤志
三宅光富 戸川直樹 波田寿一 東野一彌

【はじめに】肺癌と喫煙との関連はよく知られているが、悪性胸膜中皮腫と喫煙との関連については殆ど知られていない。そこで我々は悪性胸膜中皮腫における喫煙歴について検討した。

【対象】対象は当科において経験した病理学的に診断の確定した悪性胸膜中皮腫40例である。

【結果】①悪性胸膜中皮腫40例中29例(73%)に喫煙歴があり、内、27例はB. I. 40以上の重喫煙者であった②女性の悪性胸膜中皮腫では11名中2名(18%)に喫煙歴があり、男性では29例中27例(93%)に喫煙歴があった③喫煙年数15年未満は7%、15-30年38%、30年以上55%であった④喫煙歴と石綿曝露歴の両者を有する悪性胸膜中皮腫は45%、石綿曝露のみ2.5%、喫煙歴のみ25.5%、両者のないもの25%であった。⑤石綿工場従事者に発生した悪性胸膜中皮腫はすべてB. I 400以上であった。

P-118 悪性胸膜中皮腫の診断についての検討

横須賀共済病院内科¹、同胸部外科²、同病理³
土浦協同病院内科⁴、防衛医大検査部病理⁵
パタン病院病理⁶

○花田仁子¹、三石重紀子¹、平山 稔¹、中山杜人¹
三浦博太郎¹、諸星隆夫²、赤羽久昌³、高部和彦⁴
相田真介⁵、木村雄二⁶

【目的】1987~1996年の10年間に当院にて経験した悪性胸膜中皮腫22例について患者背景、診断方法について比較し、最も有効な診断方法について検討した。【結果】男性19例、女性3例で発症時の年齢は52~81歳(平均64±16)。20例に石綿曝露歴が判明しており、CT上16例に胸膜プラークが認められた。初診時18例(82%)に咳、呼吸困難、胸痛が認められ、胸部異常陰影のみが2例、胸壁腫瘤が2例であった。発症からの確定診断までの期間は1ヵ月以内が12例、2ヵ月が2例、3~11ヵ月が6例、1年以上2例であり、平均診断期間は胸腔鏡施行群(N=12)で1.3ヵ月、非施行群(N=10)で11.6ヵ月で、1ヵ月以内の診断例のうち10/12(83%)は胸腔鏡下胸膜生検施行例であった。胸水症例20例の初回細胞診はClass Iが3例、IIが5例、IIIが5例、IVが2例、Vが5例で、陽性率は低かった。【考察】初診時の有症状者は20例(90%)と多く、悪性胸膜中皮腫に特徴的と思われる。胸腔鏡下胸膜生検による診断期間は短く、診断に有効であると考えられる。初期には胸水細胞診の陽性率は低く早期診断には不十分である。

P-120 悪性胸膜中皮腫における局所麻酔下胸腔鏡検査の 意義

藤田保健衛生大学第2教育病院呼吸器内科

○杉山昌裕、立川壮一、堀口高彦、玉城清嗣、
近藤りえ子、平吹広一、志賀 守、宮崎淳一、
佐々木 靖、石原輝英、
同病理 堀部良宗

(目的)胸腔鏡の普及により胸水貯留を伴う胸膜疾患の診断に、従来盲目的に行われていた胸膜生検が、病変を直視下に生検できるようになった。今回我々は局所麻酔下胸腔鏡検査により診断が確定した悪性胸膜中皮腫5例について、臨床的背景因子、胸水検査所見、胸腔鏡所見、病理所見について検討した。

(結果)5例全例男性、うち4例にアスベスト曝露歴を認めた。胸水細胞診は全例陰性であり、胸水中ヒアルロン酸およびTPAは全例高値であった。胸水中シフラは2例が10ng/ml以上の高値を認めた。胸腔鏡所見では、結節性隆起性病変を2例、胸膜肥厚性病変を4例、プロイラルプラークを1例に認めた。全例胸腔鏡下胸膜生検にて診断が確定し、組織型は2例が肉腫型、3例が上皮型であった。

(考察)局所麻酔下胸腔鏡検査は、侵襲が少なく比較的容易に施行可能であり胸水貯留を伴う悪性胸膜中皮腫の診断には極めて意義が高いものと思われた。